

超未熟児の心臓手術成功

895グラム「世界でも例ない」

岡山大病院（岡山市北区鹿田町）は30日、超未熟児として生まれ、先天性の重心臓病「ファロー四徴症」を患っていた生後22日目の

上。手術時の女兒の体重は出生時と同じ895グラムで、千々以下の赤ちゃんに成功したのは国内初、世界的にも例がないという。

ファロー四徴症は肺動脈が狭いため、酸素を含んだ血液が十分に流れず低酸素血症（チアノーゼ）などを起す。同病院によると、

人工血管をより細い肺動脈につなぐ非常に難しい技術を駆使して成功した。体重が増えた9月下旬には、心臓の左右の心室を隔てる壁に空いた穴をふさぎ、狭い血管を広げる手術も無事に終えた。

月、手術を行い、成功したと発表した。9月には根治手術を実施、経過も良好で近く退院できる見通し。

女兒は妊娠31週で生まれ、内科的治療を続けていたが、病状が悪化。4月上旬、肺への血流を増やすシャント手術を施し、直径3ミリの

病室で取材に応じた母親（30）は、子どもを抱きながら「妊娠中から病気が分かっており、小さく生まれて心配した。娘が笑えるようにまでなっって本当にうれい。家族で出掛けるのが楽しみです」。父親28は「手術は成功すると信じていた。愛情いっぱい育てたい」と話した。

執刀した心臓血管外科の佐野俊二教授によると、女兒に行ったシャント（短絡）手術の対象となる新生児の体重は通常2500グラム以

ト手術を施し、直径3ミリの

会見した佐野教授は「救命には」手術以外の選択肢はなかった。術中、術後の管理も含め医学の進歩は著しい。体が小さいからと諦めず希望を持ってほしい」と述べた。（伊丹友香）



退院を控え、病室で母親を見つめる女兒（岡山大病院）